

ウクライナ語学研修生に温かな支援の輪 日本アイスランド協会が 1 人 7 万円の生活支援金を贈呈

◆連合会館で全国日本語学校連合会が贈呈式を開催

去る 7 月 25 日(月)午後、東京・御茶ノ水の連合会館 4 階会議室で、全国日本語学校連合会(JaLSA・荒木幹光理事長)主催のもと、ウクライナ難民語学研修生の交流会が開かれ、日本アイスランド協会から、20 人の語学研修生全員に、1 人 7 万円の生活支援金を渡す贈呈式が行われた。この日、会場には、戦果で苦しむ母国の様子を一瞬でも忘れさせる日本・ウクライナ両国民の温かな交流の輪が会場一杯に広がり、最後に、哀愁を帯びたウクライナ国歌「ウクライナは滅びず」を、研修生全員で合唱し式典を終えた。

授与式には、ウクライナ留学生を受け入れている学校関係者、ウクライナ語学研修生など合わせて約 40 人が参加。荒木理事長の司会のもと、JaLSA からは、長岡博司副理事長、水田穰作理事らも出席。先ず文化庁国語課の松井孝浩日本語教育調査官が挨拶し、国語課を紹介するとともに、ウクライナの研修生たちを前に、ウクライナは大変な状況になっているが「日本語研修を頑張って、日本ウクライナ友好に尽くして下さい」と一同を励ました。

◆戦果を反映したウクライナ語学研修生、男性 3 人、女性 17 人が参加

この後、交流会に移り、語学研修生 20 人中、女性が 17 人と男性 3 人がそれぞれ自己紹介をした。男性が少ないのは、ウクライナでは、日本と違い、18 歳以上 60 歳の成人男性に祖国防衛のため出国禁止措置が取られていたため、3 月時点で世界各国から 6 万人を超えるウクライナ男性がすでに帰国した事情もある。

交流会最初の挨拶は、東京都渋谷区渋谷にある東京育英日本語学校で学ぶ A さん。「以前、日本に来た時、とても日本が気に入ったため、最近、また日本にやってきました」と、日本再訪の動機を語った。同じく同校で学ぶ B さんは、日本語は学ぶのが難しい言語で知られているのに「私は中学時代から日本を見たかった。私の友達が日本に住んでいるのでやってきました。日本語が面白く、国語はとても大好きです」と挨拶し、周りをびっくりさせた。また、東京・杉並区高円寺の TOPA21 世紀語学校に学ぶ C さんは「12 年前にウクライナに帰って、また日本に来ました。日本に来てとても嬉しいです」と語ると、10 代の娘の D さんは「キエフからやってきて日本で生まれました。パパは日本人です」と元気に挨拶して、周りから盛んに拍手を浴びていた。

埼玉県さいたま市与野本町の東京日語学院で学ぶ E さんは、ウクライナは首都のキエフ(キエフ)出身。「皆さんからのご支援のチャンスを生かして次の足がかりを得たい」と抱負を語った。

同校で一緒に学ぶ F さんはドニエプル出身。「日本語は 12 歳から勉強してきました。友達に『日本に来て下さい』と誘われて日本に来ました」と来日の動機を語った。

ちなみに、E さんの出身地のドニエプルは、ウクライナ東部の工業地帯で、その名の基になったドニエプル川は、ロシアから始まってベラルーシを経てウクライナを流れ黒海に注ぐ総延長 2285km の大河川だ。河はベラルーシとウクライナの国境でもある。19 世紀ウクライナの国民的詩人シェフチェンコの詩、ダニーロ・Ya・クリジヤニウスキー作曲になるウクライナ民謡の『広きドニエプルの嵐』は約 160 年ほど前に生まれ、国歌に次いでウクライナ国民に広く愛唱されている哀調を帯びた歌曲だ。第二次世界大戦中の 1943 年にドイツ軍とソ連軍が戦った「ドニエプル川の戦い」は百万単位の犠牲者を生んだ激戦で知られているが、日本の短調のメロディーにも似たこの曲は、広く日本人にも愛され、戦後の歌声喫茶でも盛んに歌われた。

◆日本は助ける文化。ウクライナ支援に感謝する語学研修生たち

神奈川県横浜市の翰林日本語学院から来た G さんは 4 月に戦地の母国を離れて来日した。「日本語と日本が大好きです。翰林日本語学院に感謝しております」と述べて、行き届いた学業環境に感謝の気持ちを表した。最後に登場したのは、この日最大の 14 人が学ぶ東京江戸川区の江戸川国際学院の研修生たち。男性一人が欠席し、13 人が先生に引率されて遅ればせに会場にやってきた。最初の挨拶は H さん。3 月に来日。「皆にサポートしていただいてすっごく嬉しいです」と喜び一杯だった。I さんは「日本人をウクライナ人は大好きです」と挨拶。J さんは「日本に来て勉強することはとても嬉しいことでした。私の夢でした」と、来日の喜びを表した。

次いで、この日、参加者 3 人と数少ない男子研修生の 1 人、K さんは「ウクライナに対する支援をととても感謝しています。勉強に対しても、生活支援に対しても、とても感謝しています」と、日本と周囲の人々の支援の輪に感謝した。次の L さんは「日本と日本語が大好きです。日本の支援を有難く思っています。（母国は）苦しい状況ですが、頑張っています」と、支援に応える気持ちを表した。続く M さんも「私も皆さんと同じ。勉強したい意欲がとても有ります。皆様の支援にととても感謝しています。友達が日本のデザインは、面白い、ユニークなデザインがあるので、とても勉強したいです。日本の文化も知って、歴史的な重要な所を知りたい。このチャンスを与えてくれたことに感謝します」と、溢れるような勉強意欲を語った。

また、N さんは首都キーフ（キエフ）の大学からやってきた。「日本で勉強を始めて 2 か月です。色んなことに対する日本の私たちにに対する援助をととても感謝しています。日本には助ける文化があると思っています。手を差し伸べる国民性が日本人だと思います。私に関心あるのは仏教、神道、浮世絵などです。知る時間とチャンスをいただきありがとうございます」と、日本人の背景にある思想・文化への憧憬を述べた。また、O さんは「私はロシアで生まれ、もちろんロシア語ができます。しかし、今はロシア語を話す気持ちになれません。それでウクライナ語を話しています。今日の皆さんの御支援に皆、感謝しております」と語り、複雑な胸の内を率直に明かした。

◆日本の発展を見ることは、ウクライナ再生の力

Pさんは「私は日本語を2か月間、勉強しています。お礼申し上げたい。文化庁の方々、皆様に感謝申し上げます。今日のお機会をいただいたことにも感謝して、今は観光もしています。私たち若い人たちが日本に来て勉強し、日本とウクライナの関係が強まっていくことをとても感謝します」と、両国関係の深まりに感謝の念を捧げた。また、この日、二人目の男性研修生のQさんは「私の言いたいこと、付け加えたいことは、政府・文化庁の動きを見、日本の発展を見る時、新しいウクライナの再生の力になっていくと感じたことです。これはとても有難いことです」と挨拶し、日本の発展から学ぶ考えを示した。

Rさんは「ここに皆さんと居られること。繰り返しますが、日本がハッキリした態度をとったことに感謝します」と述べて、日本がロシアのウクライナ侵攻に対して、いち早くウクライナ支持の外交路線を取ったことに感謝の気持ちを表した。また、Sさんは「ウクライナから同じ気持ちで聞いていました。私は旅行者として観光で来たのですが、今は勉強できることに感謝しています」と率直な気持ちを語った。交流会の最後となったTさんは「今日の御支援、ありがとうございます。絶え間ない支援に感謝しています」と述べて最後を締めくくった。

この日、同学院の研修生を引率してきた加藤比奈子校長は、日本語教師35年。「人は宝」をモットーに、この世に育てて送りだした親日家外国人1万余人という超ベテランの「日本語先生、。」「真の国際人の育成のためには、日本語のみならず人間力も育成しなければならない」と、日本文化や日本人の人情に触れさせながら、語学留学性を教えてこられた。同校の研修生たちのこの日の挨拶は、まるでその成果を実証されたような一幕だった。

◆「困った時の助け合い」が日本アイスランド協会のモットー

交流会の後は、生活支援金の授与式に移った。^{ぼうとう}冒頭、挨拶に立った日本アイスランド協会の脇田功彦会長が、1991年に設立された同協会の歴史的経緯やアイスランドという国の特徴を紹介された。同国は漁業と^{ほげい}捕鯨と火山と温泉の国ということで、日本と類似性がたくさんあるが、人口はわずか34万人の小国ながら「男女平等、老後住みたい国、世界初の女性大統領を生んだ国、インターネット普及率、汚職の少なさ」でいずれも世界一の国だ。NATO加盟国だがEUは未加盟。軍隊はなく、警察隊と沿岸警備隊が国土防衛を担う。脇田会長は「文化、芸術、スポーツ、産業など幅広く研究するに値する良い特性を持った国です」と述べたが、そのアイスランドと30年以上の交流を持つ同協会のモットーは、『相手に何かを求めるのではなく、困った時に相手を助けること』です。家族を内戦で母国に置いて来られた学生さん方に「どういう形で支援できるか、を丸山さん（丸山晃埼玉新聞相談役）に相談し、義援金を差し上げようという話となったのです」と、生活支援金贈呈に至る経過を語った。

この後、いよいよ贈呈式に移り、会場に到着した日本アイスランド協会の安野清会長を参加者全員、拍手で迎えた。安野会長は、埼玉県上尾市に本社を置くアパレル・雑貨・化粧品健康食品・グルメ事業など総合通販事業を手掛ける年商売上高2200億円余の株式会社ベルーナの社長でもある。今回の義援金も、ベルーナから日本アイスランド協会に寄贈された寄付金を役だてたものだ。安野会長は「皆様の母国ウクライナは、ロシア軍の侵攻を受けて焦土化した。その大変な中を、皆様は、両親、兄弟姉妹を母国に置いて日本に留学された。そうしたウクライナの留学生お一人、お一人を

大切にしたい思い、支援するしだいです。日本アイランド協会のモットーは、「困った時の助け合い、です。皆様も日本語学校でしっかり日本語を学び、母国ウクライナが一日も早く平和を回復されんこと。また、皆様が健康で実り多い日を送られることを祈っております」と、ウクライナ語学研修生一同に餞別(はなむけ)の言葉を贈り、研修生一人一人に7万円の生活支援金を手渡した。

◆詩吟「富士山」と、ウクライナ国歌「ウクライナは滅びず」で交換エール

この後、石川県白山市の金城大学の^{しぎん}大西正行特任教授(政治学)が、石川丈山作の詩吟で、「お祝いの詩吟」としても有名な「富士山」を、哀調を帯びた節回しで音吐朗々と謡われ、詩吟を聞いたことのない研修生たちから盛んな拍手を浴びた。ちなみに石川丈山は、^{あづちももやま}安土桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した武将。徳川家康公に仕え、1615年(慶長20年)の大坂夏の陣を最後に、武士を隠退し、その後は^{しゅしがく}朱子学を修め、^{ぜん}禪に学び文人の道を歩んだ。1641年(寛永18年)丈山59歳の時に、今は「国の史跡」となっている京都の有名な詩仙堂を造営した。丈山が晩年を過ごした山荘跡で、現在は丈山寺となり、曹洞宗永平寺の末寺でもある。研修生には、研修終了の暁には、ぜひ訪れて欲しいところである。

ウクライナの学生さん達には、いまだ聞いたことの無い400年前の漢詩を基にしているが、会場に冴え渡った詩吟は、深く学生たちの胸に響いたようだ。「富士山」の現代語訳は次の通りだ。

《(起句) 仙人がきて遊ぶという^{れいほう}霊峰富士の頂上は、雲をついて高くそびえている。

(承句) また、洞中の淵には神龍が長らく棲んでいると伝えられている。

(転句) 下界から眺めれば純白の白絹に見立てられるような雪に覆われて、山頂から立ち上っている煙は扇の柄のごとく見える。

(結句) その姿は白扇を逆さまにしたように凜々しく、これこそ東海の天にかかる富士山の雄大な姿である。》

この大西先生の詩吟に対して、ウクライナの研修生たちは、ウクライナ国歌「ウクライナは滅びず」を全員で合唱し、この日の全ての参加者に感謝と愛してやまない母国への憂国の想いを託した。この国歌は、1862年にパヴロ・プラトノヴィチ・チュブンスキーが作詞し、1863年にムハイロ・ヴェルビツィキーが作曲したもの。ロシア革命が起こった1917年に独立を宣言したウクライナの民族主義者によって国歌に採用され、ソビエト連邦に併合されるまで使用された。ソ連から独立後の1992年に、議会によりウクライナの国歌として復活、2003年3月6日の最高議会で、ウクライナ国歌法案が成立、歌詞を一部修正の上、正式に国歌として採用された。その内容はこうだ。

《ウクライナの栄光は滅びず 自由も然り

運命は再び我等に微笑まん。

朝日に散る霧の如く 敵は消え失せよう。

我等が自由の土地を自らの手で治めるのだ。

自由のために身も心も捧げよう。

今こそコサック民族の血を示す時ぞ!》

今のウクライナの国情、ウクライナ国民の気持ちを表すのに、この国歌ほどふさわしいものはない。この後、記念撮影となり、今回の日本アイスランド協会による研修生支援の話を、全国日本語学校連合会につなげた丸山氏の音頭で、出席者全員が、日本式の“三本締め、で締めて式典をつつがなく終えた。